

酷暑の夏も過ぎ、十月。朝晩めっきり秋らしくなってきました。とは言え九月中も厳しい残暑が続く、「蚊」にとっても過酷な時期だったようです。今年は、厳しい暑さのため、蚊の発生が秋口にずれ込むとの予想がありましたが、まさにその通り。実は、蚊については七月三日の「つぶやき」でも触れましたが、テーマが「蚊」だけに、掻き(書き)足りない点もあり、今回も蚊について書かせていただきます。

子どもたちに「蚊帳(かや)」と言ってもピンとこないようです。「蚊をよけるため、四隅をつるして使う、網でできたボックス型のテントのようなもの。」と、苦しい説明をするのですが、なかなか理解されません。

江戸の頃、「九月蚊帳」と言って、九月に入っても蚊帳をつるす場合、その四隅に雁(かり)の絵を描いた紙をつけるという風習があったようです。

【雁の絵】



雁が渡ってくる頃には、蚊がいなくなるので、早くその時期が来るようにと祈りを込めたものであるという説や、いや、雁ではなくて、蜻蛉(トンボ)の絵を描くのが正しい。なぜなら、トンボは蚊を餌とするからだという説もあるようです。

日本はトンボの多い国です。トンボの古名

である「秋津(あきつ)」を用いて、日本の国は、秋津島や秋津国と歌に詠まれてきました。なぜトンボが多いのか。それはトンボの餌となる蚊が多いこと、日本の気候が温暖で雨の多いこと、水田が多いことが理由のようです。水田は蚊の絶好の産卵場所なのです。つまり、日本には蚊の産卵場所である水田がたくさんあるので蚊が増える。そのため、その蚊を餌とするトンボも増えるという訳です。トンボが蚊を餌としていることをご存じでしたか？

さらには、雁でもトンボでもなく蝙蝠(コウモリ)の絵が正しいという説もあります。糸をコウモリの血で染め、蚊帳のふちに縫い付けておくと蚊が入らぬところから、やはりコウモリの絵こそが正解という意見です。当時から、知識人が文献をひもといて、雁かトンボかコウモリか、侃々諤々(かんかんがくがく)と論じ合っていたようですが、江戸の庶民は、そんなことあど吹く風、描きやすい雁の絵を紙片に描き、蚊帳の四隅につけ、今頃(旧暦の九月)つるしていたのが、「九月蚊帳」という訳です。

蚊は昆虫の中でも羽ばたく数が突出して多いそうです。オスの場合は一秒に600回。メスは400回ほど。ミツバチが200回、トンボが50回というのですから、圧倒的。その羽ばたきから生じる気流を利用して、羽

の上に吸い上げる力を生じさせて、蚊は飛んでいるようなのです。

さらには、羽ばたきで起こる気流は、壁や床にぶつかると乱れ、蚊の触角を揺らす。蚊は、気流によるわずかな触覚の揺れを感知し、障害物が近づいたことを把握している可能性があるのだとか。

蚊は、自身の羽ばたきによってできる気流を使って飛び、暗闇の中でも障害物を感知できるように、空気の流れを再利用して飛んでいるとても賢い生き物だと、七月四日の毎日新聞「科学の森」に出ていました。

蚊の特殊な羽ばたきについて研究しているのは、千葉大学の中田敏是(としゆき)先生。中田先生によると、蚊は羽ばたきの周波数(時間当たりの羽ばたき数)を変えて飛ぶ。周波数を切り替えるときに体は上に向かうはず。だから横からたたくと上に逃げられてしまう。飛んでいる蚊は、上下に挟んでたたく方が、仕留める確率が高いとみておられるようです。蚊が好きな色は黒↓青↓赤↓黄↓白の順になるようです。白っぽい長袖の服を着て外に出る。蚊に遭遇したら、上下に挟んでたたく。

さらには、蚊はたたこうとした人の匂いを学習することができ、その人を避けるようになるという、ワシントン大学のジェフ・リッフェル先生の研究などもあり、たたき損ねてもカッカしないことが肝要なようです。

(立教小学校校長 田代 正行)